

東日本大震災の現場から、宮城の実情と鍼灸ボランティア

樋口秀吉

宮城県鍼灸師会会長

【はじめに】

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました樋口でございます。

今回このような機会を与えてくださいました形井先生をはじめ関係者の皆さまには大変感謝を申し上げます。

【震災当日と被害】

3/11 に発生しました東日本太平洋沖大地震ですね。これ（写真1）私の旧家で、壊されております。



写真1

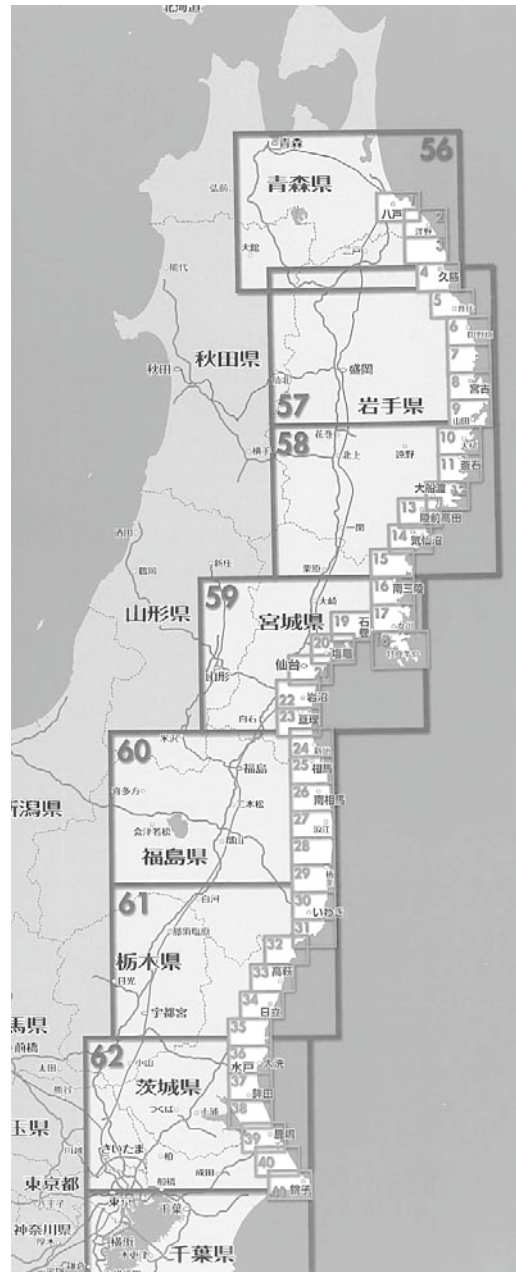
私このとき治療中でした。私は過去に津波や地震を経験しており、古くは昭和 35 年チリで発生した地震によるチリ津波。それから、昭和 54 年の宮城県沖地震、7 年前の宮城県北部内陸の地震。そして、今回の大地震です。津波の様子については、私より皆さまの方が詳しいと思います。私は被災地であって、地震でライフラインが途絶えまして、当時の津波の状況は4~5日経ってから知りました。今回は、震度7ですね。この地震や津波によって破壊、流失。さらには、原子力発電所破壊による放射能汚染。私、宮城県ですけれども宮城の方まで放射能汚染されています。

今回の津波は、青森、岩手、福島、宮城、茨城、千葉とものすごい範囲で。かつて無い広範囲で被害を受けております。その中で私は、宮城県松島町と

いうところに住んでおります。

被害状況であります。多数の死者、行方不明者がでています。

宮城県ですね。この沿岸部全てですね。津波によって破壊、流失されています。この地震によって多くの家屋が破壊されましたが、あまりにも津波の方が大きくて、地震で崩されている部分は報道されていません。



住んでいますのは松島町ですね(図1)。多く被害が
でているのは隣の東松島市です。津波によるですね。
日本三景松島の観光地です。津波の被害の大きい石
巻市、東松島市になっています。



図1

今回の津波は、東松島市の東名、野蒜地区という
ところで、ここに海水浴場があります。こちらの太
平洋から津波がどっと来たわけですね。この東名、
野蒜地区の方は津波だーといってこっちを見てい
た(松島湾の方向)。そしたら津波が後ろから来た。
野蒜海岸の方からどっと津波が通り抜けたのです
ね。この黄色が津波の浸水地域ですね。ですから家
屋が倒壊したガレキが入ったものがこの松島湾に
入ってきました。当然人間も流されました。(図2)

この野蒜海岸からの津波がですね、松島湾に入り、
天王崎と蛇島崎に当たる。一つは、陸前富山駅の方
へ水が入って行って、もう一つは、松島海岸駅の方
へ入って行った。ここ(手樽海浜公園)が私のとこ
ろの堤防になります。ここ直線で500mくらいな
んですけども、この堤防が守って浸水しなかったと。
私のところは津波の被害はなかったということだ
すね。

津波の力の方向性と堤防の向きが平行であった
ことで津波の圧力が直接伝わらなかったんですね。

これは(写真2)私の家から海を見たところです
ね。これが先ほどの堤防です。元々ここは海でした。
岬と岬の間を埋めまして海水を塞ぎ止めて、海水を
掻き揚げて干拓した田んぼなんですね。陸地が繋が
って見えるのですが島と島が折り重なって繋がっ
ていません。海の中に見えるのは牡蠣の養殖棚です。



図2



写真2

治療していました。地震当時、動こうとするので
患者さんを押さえつけていて「大丈夫だって」言っ
たらこの壁がボンと飛んできたんですね。壁がはが
されて、ちょうどエアコンが落ちこなくて助かっ
ている。ほかの壁は残ってはいますけど、壁のボー
ドが全部浮いていてダメです(写真3)。

これは事務室ですね(写真4)。このように壁が全
部剥がされています。みんな倒れていますね。

自宅の玄関(写真5)中の状態。食器類はほとん
ど壊されました。

これが古いほうの家です。窓からなにか壁まで
上から落ちこちてしまいました。中は、物が落下し
て、ぐちゃぐちゃな状態になりました。



写真 3



写真 6



写真 4



写真 7



写真 5

外回りですね (写真 6)。後ろの山の部分の土砂が崩れてきて家が押されてます。

土止め擁壁の部分も壊されています。ちょっと角度を変えてみると山の部分です。ドサーッと落ちてきているんですね (写真 7)。

地震直後の対応です。このような状況で、崩れて倒れた物を除けて出られるようにしまして、まず患者さんを無事に帰宅させました。それから治療院のスタッフですね。スタッフは 4 人いまして、地震当時、残っていた 2 人を帰しました。

それから家族の安否確認と対応をしました。この日は寒く冷えた日で、照明、暖房を確保し、当日は終わりました。

次の日、隣近所の安否の確認、地域の被害状況の確認、うちの地区の避難所の確認をとりました。安否の確認をとってから、私の地区には、津波は入ってきませんでしたけど、家が大きく壊されたところが多く、山を背に家が建っている家は、崩れてきた土砂で潰された家もあり、近くの集会施設に非難をしているという状況でした。

ライフラインがストップしたので、避難所では、ろうそくを持ち寄り、照明を取りました。発電機を持っている私の親戚に交渉したところ、ガソリンがないというので、私がストックしていたガソリンを持参し手助けをしました。

それから余震が続いていました。それで、いわゆる安全な生活の確保です。避難所に非難する。私の家は大きく壊されましたが、あの大きな揺れで潰されず建物が残っているの、少し補強すれば大丈夫だろうと思い、補強しました。大きな揺れで倒れそ

うなものは、立てずに横にしておきました。

それから、全てのライフラインがストップしています。電気、水道、ガスです。うちもオール電化にしたばかりで、電気がストップしましたので炊事もできません。しかし、うちは、よく友人を呼んで庭でバーベキューとかしますので、LP ガスボンベとコンロを持っていたので助かりました。

あとは、保温の確保ですね。震災の夜は、すごく寒かった。先ほど冒頭の写真にあったように雪が降っていた。あの写真は、震災翌朝です。かなり冷え込みました。これも灯油のストーブを持っていたので助かりました。水は、雪が降りましたので屋根の雪解け水を溜めて、洗い物やトイレの流し水に使用しました。飲料水は、湧水を汲みに行ったり、給水車を利用しました。

あとは通信網の確保ですね。古い携帯ラジオを引っ張り出し情報を収取しました。携帯電話では充電に苦労しました。乾電池は品切れで、いろいろな形でようやく少し充電できて、電源を入れると、安否確認の着信歴、メールがドーとダウンロードされて、バッテリーがなくなってしまい、返信しようがなくなる。一人の方が心配して、何回も電話やメールをくれる。それが多くの人から来るので、大変な量になる。携帯電話は、非通知にしていなければ着信歴が残るので、「一人 1 回でいいよ」と 1 人で叫びました。

【ボランティアの前段階と受け入れ準備】

私の家は写真のように壊されましたけど、津波は入らなかったんで汚泥等の処理は必要なかったことと、被害の大きさから修復はすぐにはできないだろう、そんなに急ぐ必要はないと思いました。そこで、まず、震災の一週間後に予定されていた徳島の学術大会があり、出席しようと考えました。そこまで行くルートを探してもらったところ、1 人分キャンセルあり、参加しました。会場ではびっくりされました。一部では私が津波にさらわれたと流布されていたとのことでした。その大会でボランティアの募集をしました。大変でしたね。多くの方々からボランティアに行きますと言われました。ボランティアで来ていただくのは良いが何をしてもらうん

だろうと・・・まあその時はですね。

次に、大会から戻って、私がやったことです。うちの患者さんの多くは、津波の被害の大きい東松島市、石巻市で、うちの患者圏がそこなのです。多くの患者さんが亡くなりました。毎日新聞に死亡確認された方々がその都度掲載されまして、数日新聞を確認していました。ところが毎回記憶になる患者さんの名前が出てくるので具合悪くなってそれから見ないようにしました。ですから何人死んでいるかわかりません。生きていても被災者で避難所生活者です。したがって、治療室に患者は当分来ないだろうと思いました。しかし、患者さんが来た時に「受け入れ体制をしておかない」と思い、まずは治療室の復旧に手をかけました。

うちも被災者ですので、親戚の方々がたくさんお見舞いに来てくれてボランティアを受けました。ずっとライフライン、水道の供給が止まっていたので井戸から水を汲み上げ運んでくれて、旧家の薪風呂を残しておいたものに水を入れ、風呂の焚口の壊れたところを修復して頂いたり、治療室を復旧させるということで、壁の張替え、補強、やってやるからということで工具から何から一式持ってきてやってくれました。

壁に張った板、これは通称コンパネと呼んでいるもので、建物の補強になるんですね。普通は床板などに使われるのですが、強く普通の石膏ボードよりも強度があります。こう張りつめると地震で揺すられても壁の面で持ってくれますので潰れることは無いのですね。このようにですね、(写真 8) 張っていただきました。体裁はとにかく使える状況に最初しました。

しかし、素人がやるものですから、電気のコンセントの穴くり貫いてくれたのは良いのですが四角の穴が大きすぎて、コンセントの金具を留めようがないのですね。知らないんで穴をあけて通しておけばよいと思ったのじゃないかな。仕方ないので私がやったのはサンをつけてコンセントの金具を留めました。(写真 9) これが全部なのです。こうなるとやって頂くのはありがたいのですが、これをきれいに直すのにコンパネ一枚交換するしかないのですね。ここを建てる時に部屋の使い方が変わったりすると

長い延長コードを張り巡らさなくてもいいように各部屋コンセント口を結構多く付けてあります。しかたないので見た目よりも使えるようにと、やり直す時間的余裕がないので、当分このままでいいと思っているのですけどね。これはひとつの例ですが、お手伝いをいただいて、「このようにするはずでなかったのに」とやって頂いたところを、やり直しをやったことが多々ありました。



写真 8



写真 9

このようなことを経験して、「ボランティアというのは何だろう？」と私は考え始めました。「決して押し付けであってはならないだろう」と。「やってやるから」と「やった結果が相手の望んでいたものでなかったら」手伝いをした意味がなくなる。ボランティアというのは、「相手の望むことで自分ができる手助けを、望むように手助けすることである。」という風に考えています。「決して自分の自己満足であってはならない」ということですね。

一つ鍼灸マッサージの例をとりますと、「鍼が痛かった」「マッサージの揉み方が強く痛かった」「さっさと終わり物足りなかった」受けた側は、こういう気持ちを持っていても「ありがとうございました」「楽になりました」と言うのです。大概受けた

人はそういう思いがあっても言います。せっかくやって頂いたのだからとやってくれた人に気遣い、そう言います。

それから、施術を受けて、時間が経って、「だるくなった」「痛みが強くなった」「疲れ感がいっそう強くなった」「次の日朝、揉み返して体が痛くて辛い」、また、昨夜「熱がでた」と、こういった例いっぱいあるのですね。

そんなことから「鍼灸ボランティアはどうすれば一番いいのか」「どのようにすれば喜ばれるボランティアにできるのか」を復旧作業しながら常に考えていました。うちにボランティアに来て頂いて何をしてもらうか？うちのガレキの撤去、土砂の片付け。でも鍼灸師がそれを毎日やってもつまらないだろう。それも遠くから来るので日帰りは困難。宿泊はどうするのか？

そのようなことから、私の敷地内に古い家が2棟ありますので、そこに宿泊できるようにしよう。しかし地震で、もうぐちゃぐちゃで・・・これを片付け、修復しました。根本的な修復はできませんので、使えるようにしました（写真 10. 11）。

当初、片付けたとき写真とか撮ってなかったのです。後から残したほうがよいかと。ここに当初はベッドが並んでいたんですね。診察ベッド 6~7 台使用していないものがあったので。何故並べてかという余震がつづいていたので、寝ていて地震が来てももしかしたら崩れるかもしれないからベッドの下に隠れてもらうと。そうすれば安全だろうと。現在、この白いのは何かと言いますとボランティアが入ってきて当初は寒かった。だんだん暑くなってきて応急処置しましたが、隙間だらけ、穴だらけなので、はえ、蚊が入ってくるので、寝泊りしてもらうのに、これ蚊帳ですけどこれ二釣。（白く釣り下がってるもの）掃除するために捲り上げています。それから、もう一つ建物がありまして窓が壊されました。これには、ガラスを入れ、散乱して壊れたものを捨て、外れたものをはめ込みこのようにしました。10 畳ありますのでこうすれば寝泊りできるだろうと。歪みはさほどなかったもので、きちっと締めれば上綱戸で快適に寝れるだろうと。



写真 10



写真 12



写真 11

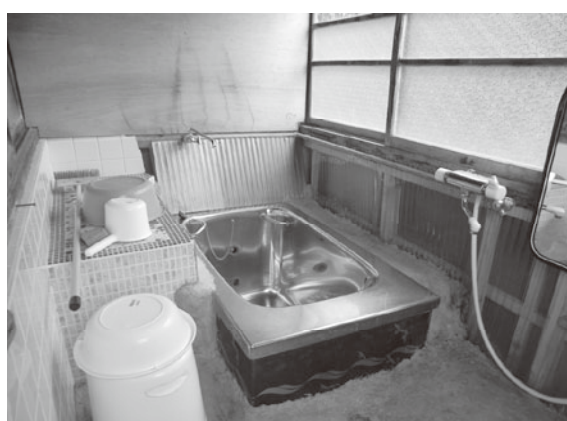


写真 13

ここにはもう一つロフトがありまして、ここも寝れるだろうと。そういった思いでやりました。

それから事務所に使ってた建物があり、ここで食事を取ってもらったり、ボランティアに必要な物品、鍼とか置いています。

これが台所ですね（写真 12）。このように整備しました。

整備したところへ、水道の供給がやっと通じた。ところが水が出ない。どこかで壊れ漏水している。そこで水道管の穴掘りをしました。水道工事店に頼んでも、どこも壊れて漏水しており、本管工事が優先で忙しくて来ない。仕方ないので、自分で漏水箇所を探して修理して、繋いで、水を通し出しました。それから旧家のお風呂です。風呂ステンレスで周り

が壊れています。道工事店の社長が来て、「何やってんの」「ボランティア受け入れするために風呂使えるようにしている」「シャワーいる」「あればいいね」と、次の日、シャワーとガスのボイラーを取り付けてくれました（写真 13）。さらに、庭にテント張って数多く泊まれるようにしました。

津波の被害は宮城県だけでも沿岸の市町村すべてで、広大な浸水範囲と被害、多くの死者と被災者、行方不明者です。ボランティアの受け入れ基地を立ち上げボランティアを避難所に入れるにしても避難所の数からしてやれることはたかが知れております。

【ボランティアの準備】

一人もしくはグループでボランティアに入る。ルートを確保して各避難所でボランティアを出来る人。そういった方々は独自でどんどんやってもらおうと。うちで受け入れするのは自分がもっているもの、できるものでボランティアをしたい。しかし、どうしたらいいのかわからない。どうすれば、被災地でボランティアができるのかわからない。一人では不安だ。そういった人たちを受け入れて、入ってくるその人に見合うボランティアをやってもらおうと。ボランティアをやってもらおうお世話をしよう、ということです。

そこで、それを立ち上げるときに、じゃこの基地をどのような形にするのか？私は組織として宮城

県鍼灸師会の会長という立場にあります。経絡治療学会の副会長、東北支部の支部長でもあります。どちらかの団体を母体にしようと思いましたが、宮城県の鍼灸師会として取り組むよとしたときには理事会の承認がいる。経費はどうする。予算はどうする。役員が交代で基地の当番をしたり、いろいろな制約がでてくるのです。何かをするにも会議を開かなきゃいけなくなってきました。そんなことから、私個人で立ち上げました。経費はすべて私個人が賄う。私に関わる組織に所属している方には、あなたの方の都合の良い時に手伝いに来てもらえばいいということにしました。

募集をどうするか？募集要項を作成しました。これをいま紹介していると時間なくなります。これはインターネット上でも載っています。下記参照。それから名称ですね。個人で立ち上げたものもここにひとつありまして、宮城県鍼灸師会として立ち上げた場合、例えばあん摩マッサージ指圧師がボランティアにきたい場合、鍼灸師会なので会として、断らざるを得ないことになってしまいます。

こういった制約がいっぱいでくるので個人で立ち上げました。名称は、被災者に自分の持っている技術で、施術ボランティアを行ってもらおうので東洋医療と幅広くしたのです。こうすることによって東洋関係の人幅広く来れるようにと。名称しました。

受け入れ条件

- 1、ボランティアの基本を順守してください。
- 2、ボランティア保険に加入してください。(地元の社会福祉協議会へ問い合わせてください。)
- 3、施術に関する用具一式を持参してください。
- 4、寝袋を持参してください。
- 5、簡易ベットお持ちの方は、ご持参できると助かります。
 - ◎ 基地局も被災地ではありますが、簡易宿泊、風呂、食事のお世話はいたします。
 - ◎ 鍼、消毒用品、マスク等は、セイリン、カナケンさんから提供を受けており十分間に合いますので、それ以外の個人的な鍼灸用具をご持参ください。
 - ◎ *基地局の運営ボランティアも募集します。

仕事内容

- ◎ 1、避難所への派遣準備、カルテの整理等の事務作業
- ◎ 2、パソコンからの情報発信(ホームページ作成など)
- ◎ 3、基地局の整備(部屋の掃除、風呂炊き、食事の準備などボランティアへの援助)

申し込み方法

- ◎ ボランティア申し込みは、FAX かメールにてお願いいたします。
- ◎ 基地局に入る日時、帰宅日時をはっきりお知らせください。
- ◎ まだ、公共の交通機関が完全に復旧していませんのでご了承ください。
- ◎ JR 仙台駅から東北本線にて松島駅下

被災者支援 プロジェクトチーム
東洋医療ボランティアセンター基地局
表世話人 樋口秀吉

〒981-0211

宮城県宮城郡松島町手樽字茨崎 18-11

電話 022-354-2776 FAX022-354-4495

メール:saigaisien98@gmail.com

基地支援団体:社団法人宮城県鍼灸師会

経絡治療学会

ボランティア希望者を受け入れコーディネートするためには、避難所がどのようなになっているのか？避難者は何人いて、どのような生活状態なのかという避難所の把握。避難所は、たくさんあります。それを全部網羅できるわけないし、把握しきれない。大きな事をやろうとしても無理だと。背伸びをせず、我々がやれる範囲でボランティアをしようと考えました。まずは、地元の松島町の避難所の確認ということです。当時、松島には三箇所ありました。隣の東松島市から被災者を受け入れている場所が三箇所ありました。松島町の被災者と東松島市の被災者が一緒に避難している避難所がありました。そういった避難所の確認を先ず行いました。規模の把握。避難者どれくらいいるのか？医療ボランティアを入れた場合、施術希望者はどれくらいになるのか？

施術スペースがとれるのか？そのスペースがプライベート空間を確保できるのか？施術ケアのための空間が作れるか？そういったことを最初調べました。それらの内容によって入るボランティアの数、持参する機材の内容が違ってきます。例えば、避難所の避難者数、200人以上いるところ、40人くらいのところと、それぞれですが、鍼灸マッサージケア希望がこの中でどのくらいいるのか？当初は予測がつかません。避難者の方で鍼灸マッサージにかかったことある人という経験者はまずいない、そういう状況で希望者どのくらいでてくるのか？その人数に対してボランティアの人数をどのくらいいたらいいのか？また、基地に入ってくる人数がまちまちで、多いときはまとまって10人とかどっと来る場合もあります。一人で来る方もいます。その入ってくる状況に応じて避難所を把握しておいて、その避難所の希望に合わせて派遣していきます。それから、施術ケア希望者に悔いを残さない。避難者が多いところに入り希望者が多くて、手が回らなくて需要と供給が合わない。そうしますと「私もしてほしかったのに」という気持ちを抱かせてしまう。明日もくるのであればよいのですが、1日だけのボランティアが多い。こういう事をできるだけ起こさない。ボランティアさんは、例えば、一週間各避難所を回り、毎日、毎日やって疲れる。疲れを起こしますと、ミス、事故につながりますからこれを起こさない。無理なボランティアは行わない。ボランティアは、2日でも、1日だけでもいいのです。必ず長く、いっぱいしなくてはならないということではない。自分に余裕をもってできる範囲でやる必要があります。

それから今度は、避難者の現状の把握です。ほとんど段ボールに毛布を敷いて寝ている。手足は十分に伸ばして寝られない。隣には他人が寝ている。色々な音がする。あるいは臭いが気になる。さらには余震で揺されると。で、避難者っていうのは、いつも大小なり緊張感を持っているという現状です。これが避難所の様子です（写真14）。

荷物でスペースを区切らせている。これもそうですね（写真15）。



写真14

避難所によっては段ボールで囲って、番号つけ、何丁目何番とか整理している避難所もあります。たいていはこのように広いところで自分の私物で囲って寝泊まりしているのが現状です。

これは大きな避難所ですけど、広いスペースにみんなといたくないので通路に出てきて囲って生活しています。通路に物を置いて寝泊まりしている（写真16）。



写真15



写真16

【ボランティアの注意点】

私が考えるケアです。ケアをするスペースをきち

んと確保するという事です。居住スペースと離れたリラックスできる空間を作る。同じ被災者から離れた対人関係の場を作る。被災者の話を聞く。避難所ではみんな被災者ですから同じなのです。自分の被災状況とか、辛かったことを話す。「やー俺も同じだよ」と。それで話が終われる。ところ全然知らない我々が行く。そうすると、津波に合った状況とか色々話してきます。そうしますと、同じ被災者ですけど、あり方が全然違います。被災者にはそれぞれのドラマがあります。そのドラマを聞くことによって、話を聞いてもらう側はそこで安らぎとか安堵感が出てくるのです。被災者同士では、同じですから話が進まない。安堵感、やすらぎを得られない。

それからできるだけリラックスさせた状態でケアを行う。鍼灸の施術の現場をできるだけ他の人には見せない。鍼を刺しているところを、それを見るだけで鍼って怖い、嫌だなとかの感情を持ってしまいます。

それからもう一つ。我々は医療者であるという自覚を持ってその準備にあたるということです。従って、被災者が居住する、もしくは使用する場所との仕切りを必ず取るということですね。衝立を使って、足りない時はこういう布などを使ったりしています。

スクリーンを使ってベッドを置いています(写真17)。ベッドは必ず持っていきます。ベッド、シーツ、タオルケット、毛布など、必ずセットで持参する。畳の場所では、傷つけないように、ベッドの足に板を敷いています。



写真 17

それから、避難所によってはどうしてもブースが作れない。空き部屋とかスペースが取れない。その

場合にテントを借りて、私の地区の集会所に地区のテントがあり、そのテントを会場に持って行って会場に設営してということもやりました。テントを持参して行って避難所の玄関脇とか、設営できる場所を確保すると。しかし、テントはすごく大きいので設営に6人が必要なのです。

それで、テントを作りました(写真18)。これが2間×3間ありましてベッドを5台入れることができます。これは、2人いれば設営できます。幸色の黄色にしました。がんばろう東北、がんばろう日本。これテントを作って頂いた会社がサービスで作ってくれました。緑のテントは、(右側テント)自衛隊のお風呂の提供ですね。このようにして施術スペースを確保するということが大事ですね。

鍼灸の用具と器材です。鍼はセイリンさん、カナケンさんから提供。もぐさは釜屋さんから提供。消毒液、マスクも提供頂いています。うちに当初あったのは折り畳みベッド3台(内、2台は宮城減鍼灸師会所有のもの)、スクリーン1基、タオルケット、バスタオル、シーツ、枕、胸マットこういったものがありました。ボランティアが入ってくるに従って足りなくなり、のちに軽量の簡易ベッド3台、スクリーン3基を買いました。そしたら、北海道から簡易ベッド1台を送ってくれた人がありまして、今現在4台。最初の3台と合わせて7台使えるようになっています。私はとくに施術ブースを作っただけ治療室の状態に近づけプライベートな空間を作ることにこだわってやってきました。一気に準備できないので当初からずっとやってきたにあたって、少しずつ備品を揃えてやってきました。



写真 18

それからもう一つこだわっているのは継続性です。やりっぱなしのボランティア、自己満足のボランティアは避けたい。うちからケアに入った避難所。一度入った避難所は継続してボランティアを入れていく。そうすることによって、避難者を経過観察しながらケアしていけるということです。避難所も時間の経過とともに変化していきます。

これは基地立ち上げ直後から考えていたことです。震災があった直後は、病院側なのですね。それが段々と避難所で時間が経てば経つほど被災者はこれから先の不安が出てきて、なかなか寝付けない。余震ごとにビクつく、職も失った、家も失った。いろいろなことを考えてしまう。そうすると時間の経過とともに身体的変化も起きてくる。これがある程度進んでいくと慢性になって身体的変化があるが自覚がなくなってくる。鬱になる人、気分が逆にハイになる人、いろいろなことが出てくる。鍼灸はそういうところに必要で、効果的なケアができると思っています。

ボランティアの受け入れの立ち上げ前に、「ボランティアに行きますから」「すぐにでも行きますから」と、言って頂きました。しかし、いや少し待て、もう少し待てと。避難所がごたごたしている時（避難者は、家族、身内の消息確認、飲料水、衣服、寝具等の調達の方に多忙な時期）に、我々のボランティアは、希望者は少なく、有難味も薄い。ある程度落ち着いてから、継続的に入ることで、鍼灸のケアが生きてくると私は考えています。

それから、連続でボランティアに入る。これ当初は気づかなかったことですが、二日間連続で入ると、前日に治療した結果が診れます。二日間ボランティアに入れる人は、次の日行きますと、その効果と反省点を知ることができる。「全然何も変わらなかった」「痛みがひどくなった」とか。「昨日やってもらった後は良かったけど、今朝起きる時にかえって辛くなった」などいろいろな反応を起こしてきます。その結果に応じて再調整の治療ができる。これが結果としてより良いケアができ、受療者に安心感を与え、信頼感と再利用へと繋がっていく。そうすると、また利用してもらえます。継続的に診ていけるようになります。

カルテですが（図 3）。受療者の基礎代謝の把握ですね。血圧、脈拍、体温、目の状態、精神状態、行動、ここに大きく異常がある人は保健福祉センターに申し送りをしていく。自分の行った診察や治療を記載していく。このようなカルテを作っています（図 3）。流されていま家が無いけど元合った住所。名前。避難所名。このカルテは一回の治療に一枚としています。先程の異常のあった方は、申し送り書ですね。文書にして各市町村の担当課へ申し送りをする。市町村の方では、保健師が避難所をおとずれ指導もしくは、見合う医療機関へ紹介していきます。

カルテの整理と保存ですね。カルテは避難所ごとに、あいうえお順で保存しています。施術者が毎回違うことが多いので 1 施術 1 カルテとしてす。

どんどん枚数は増えていきますが経過と毎回の施術内容を追えるようにしています。

責任の所在ですね。避難所には多種多様のボランティアが入ってきています。我々と同系のボランティアも個人、団体で入ってくる。その方々と区別することと、施術後の変化で不安なときの問い合わせ先を知らせることで責任の所在を明確にすることです。

基地には、看板の設置をしています。それから、避難所での活動時には、ポスターで告知しています。

基地では、松島町社会福祉協議会への登録をしていて、ボランティア保険へ加入しています。毎回ボランティアに入ったのちにその都度活動報告をしています。

これが入口に立てた看板です（写真 19）。ボランティアに入る際に、避難所に行って打ち合わせをして何時から何時まで入りますよと書いて置きます。避難所ではこのように（写真 20）掲示してくれて、避難者はいつ来るかわかります。団体名をきちっと入れて明確にしています。パネルも作りました。資格免許ですね。我々のボランティアはこういう資格者ですよ。どういう団体なのかを明確にすることですね。避難者に「あの団体か」ということを認識して頂くと、再度伺った時には好意をもって受け入れられます。

避難所の状態は、段ボール、マット上に毛布を敷いて寝ているので、各種の痛みが出てくるのは当然

です。3月に震災があつて、3月・4月は被災者のほとんどが睡眠薬を飲んでいました。眠れないですからね。不安、いらいら、苛立ち、驚き、恐怖、疲労、月経異常。震災後月経が全然来ないという人もいました。異常行動、衝動。まあこういったものもあります。



写真 19

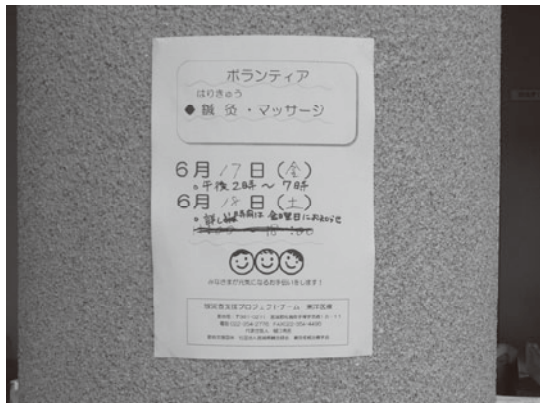


写真 20

効果として継続的に入る、どこからのボランティアなのか責任の所在を明確にすることによって、各避難所の運営管理者及び避難者に信頼と安心感を得られるということですね。継続的に入ることによってボランティアに行くと器材の搬入の手伝いを頂いたり、準備が終わらないうちに順番取りに並んだり、順番取りにいさかいになることもありました。

施術は希望によりますが、鍼灸は馴染みがないからマッサージが多い。そこで受付で鍼治療の方が多くの効果が期待できますよと進めてみたり、鍼灸治療を受けた人から聞いて、じゃ私も今日は鍼をお願いしようかしらと。親子で、家族で避難していますから母親が鍼灸治療を受けて、子供がおかしい、落ちつきがないなど相談されたり。子供も被災者で震災前とは違った生活をしていますから様々なストレスを抱えているのは当然です。

診察処置表

年 月 日		市町村名:	
施術時間: ~		避難所名:	
氏 名: 男 女 年齢 ()		住所地:	
ケアの目的 疲労、ストレス、不安、不眠、トラウマ、離脱症状など		内服薬 血圧、心臓、糖尿、便秘、痛み止め、睡眠薬 安定剤、血液サラサラ、コレステロール、骨粗鬆症 その他 ()	
痛みなど気になる部位 ・頭・首・肩・腕・肘・手首・指 ・背中・腰・股関節・太もも ・膝・すね・ふくらはぎ・足首・足 ・その他 ()		治療中の病気/既往歴 (入院、けが、手術、持病)	
以前、同様のケアを受けたことがありますか? ・ ない ・ ある ()		伝えておきたいことがあれば、ご記入ください。	
<バイタルサイン>			
顔 目	呼 吸	血 圧	脈 拍 体 温
		/ mmHg	回/分 °C
特記事項:			

施術者記入欄	
	処置内容 ・はり治療 (レ点) ・きゅう治療 (△) ・あん摩・指圧 ・マッサージ (クリーム・オイル) ・アイシング ・ストレッチ ・PNF等の手技 ・テーピング ・その他 []
	施術者名 ()

図 3

子供の場合には痛くない怖くないことを知ると子供から子供へ広がるんですね。ですから、子供の治療者が増えてきます。

初めての避難所に入りますとケア希望は、ほとんどマッサージ希望です。それが継続することによって鍼灸の希望者が増えてきます。50人規模の避難所で30数人がケアを受け、ほとんどが鍼灸治療になったところもあります。この継続ということが大事だと考えています。滋賀県から被災地の石巻市に毎月ボランティアに入ってくれる。こうやって継続して入ってくれると避難者は癒されるし物凄く助かります。なかなか遠方からできることではないです。単発で1日間か2日間かボランティア行ってきましたという報告をもらいますけど、まあそれっすりです。それもいいのです。ボランティアっていうのは色んな形がありますから。しかし、被災者のことを考えてのボランティアではないのではないかなと私は思っています。

【震災後 5 ヶ月の現状】

今、宮城県の被災者は避難所から仮設住宅に移りつつあります。避難所も統廃合されて少なくなっています。しかし、すぐにはなくならない。仮設住宅に入りたいけど入れないという状態も出てくる。家も車も仕事も失っているという方々がおられるのです。仮設住宅に行きますと、光熱費とかすべてのことを自分で負担しなければならない。ところが仕事がなく、仕事が見つからない。避難所にいけば衣食住提供される。仮設に行きたくても行けない。ほかの条件があってもなかなか移れないという人たちも、まだまだたくさんいます。それから、市町村によっては仮設住宅の建設が追いついていないところもあります。

震災から 5 か月が過ぎまして瓦礫はだいぶ片付いています。町並みは流されて土地だけです。更地できれいになってきています。

これから復興はどうするのか？これは被災市町村の課題です。死者、行方不明者、毎日新聞に載っていますけど、行方不明者まだたくさんいます。宮城県だけでもまだ、3000 人弱おられます。前の日と比べて見ますと死者が増えて不明者が減っている

から、確認がとれたんだと思います。

私の地元、松島町は観光地で、ホテル、旅館がたくさんあり、県外からの瓦礫の搬送、各種工事の方々の宿泊を受け入れております。そのため車が毎日うちの前を通ります。警視庁の車もいます。他県の警察の車がたくさん来ております。瓦礫はだいぶ片付いてきましたが、行方不明者がまだたくさんいます。これは警察しかできないので、集中的に現在も入ってきています。そのような状況にあります。

最後に、継続的にケアに入っていた避難所が閉鎖する数日前の事です。仮設住宅に入るようになった、継続的にケアを受けられていた方から、炊き出しなど色々なボランティアを受けたが、「おたくのボランティアが一番よかった」「ありがたかった」と言われました。こういう時が、基地を立ち上げてボランティアを受け入れ、避難所のケアをやってきてよかったなとおもうところです。

今月もボランティア希望者が入ってきます。立ち上げたからには避難所が無くなるまで継続しないとならないのかなと思っています。

時間ですので以上で終わらせて頂きます。